

# 第15回日本語大賞

特定非営利活動法人日本語検定委員会



高校生の部 優秀賞 受賞作品

『ひとつぶひとつぶに感謝』

東京都

白百合学園高等学校

二年 砂取 穂乃加

ひとつぶひとつぶに感謝

白百合学園高等学校 二年

砂取 穂乃加 (すなとり ほのか)

「万物生光輝」(ばんぶつこうきをしょうず)、書道を習い始めて十年、私が初めて自分で書きたいと思った言葉だ。全てのもが光り輝いている、人間だけでなくこの世に存在する全てのもが、光り輝いている。

今年も夏が来た。皮を一枚一枚剥いていくと、黄金色でぶっくり膨らんだ身がぎゅっしり詰まっている。なんともみずみずしく、夏の薫りがする。北海道の農場から、  
「送ったよ。」

と連絡があり、心待ちにしていたトウモロコシ。夏野菜の代表だが、私にとってトウモロコシは夏を実感する特別な野菜なのだ。

北海道で出会ったスキーインストラクターは、ご両親と三人で帯広で農業を営んでいる。夏休みに遊びにおいでと声を掛けてくれたので、お言葉に甘え、家族で帯広の農場に二泊三日で収穫の手伝いに行ったのが、ついこの間のように思い出される。九歳の夏、たった三日間だったが、私も働き手の一人として奮闘した。農家の生活は過酷そのものだった。午前三時半に起床し、五百本以上のトウモロコシ、ミニトマトやゴーヤなどを収穫。ある程度収穫したら、収穫チームと仕分けチームに分かれ、サイズの選別、袋詰め、箱詰め、ラベル貼り、トラックへの荷積み、農協やスーパーへの出荷。収穫から出荷まで想像以上の仕事があることに驚かされた。おまけに前日は暴風雨でトウモロコシ畑は水浸し、茎は倒れトウモロコシが泥で汚れてしまっていた。私は、収穫したトウモロコシの泥を、一本一本乾いたタオルで丁寧に拭き取る作業を任された。消費者の立場なら、見た目がきれいな野菜を選ぶだろうから、身の引き締まる思いで必死に拭き続けた。とにかく出荷の時間までに終わらせなければならぬので、朝食や昼食を食べる暇もなく、気が付けば、あつという間に午後三時を回っていた。農家の方々は、この繰り返し毎日休みなく続くのだ。猫の手も借りたいとは、こういうことなのだと思感し、九歳の私でも少しは役に立てたかもしれない。

「とつても助かった、ありがとう。」

の言葉に、達成感で胸がいっぱいになった。この貴重な経験が私の人生の糧になっていることは間違いない。

農家の方々は、高齢化や人手不足、異常気象などで大変苦労されているのを目の当たりにした。台風や豪雨のニュースを見るたびに、農家の方々が休みなく育てている農作物が被害に遭わないか心配でたまらない。大切に育てた野菜なのに、泣く泣く廃棄しなければならぬこともある。逆に消費者である私たちが無駄に廃棄していることも事実だ。食品ロスが問題になっているが、一人でも多くの人が農業に興味を持つことで、食に対する意識が変われば、未来も変わるだろう。そして、消費者である私たち一人ひとりがSDGsの食品ロス削減に取り組んでいくことで、日本の農業を守ることにつながるかもしれない。食卓が国産のお米や野菜で潤う「当たり前」が続くように。

「万物生光輝」。この言葉と出会ってから、視覚だけではなく心の目で物を見ようと思えるようになった。届いたトウモロコシを手にすると、ずっしり重く収穫までのご苦労が目に見え始める。だから手の上にあるトウモロコシがきらきら輝いて見えるのだろう。

あれから八年、毎年トウモロコシが届くと、あの夏の日のことを思い出す。